ニュー・イングランドへ（10）ハリケーンで予定変更　　2023.10.16.

9 月 23 日(土)にはマーサズ・ヴィニヤード島の図書館へ行く予定でした。資料の閲覧許可を頂いて、研究司書の方とお会いする事になっていました。ところがハリケーン北上中との予報、更に島へのフェリーが欠航となったとのこと。万事窮す！天候の回復を願って、翌 24 日の予定と振り替えることにしました。

稲垣さんは、日本では入手不可能な(1)「F. Kern 著の“William Cooke Pease 船長について”」を読みたい、島の図書館に保存されている(2)「Pease 船長の手稿の日記」を調べたいというご希望でした。幸いナンシーさんが、サンドウィッチの図書館でその本を借り受けて下さっていました。まずは、その本を読むことにしました。辞書を持参していて助かりました。

ジョセフ・ヒコの自叙伝によれば、William Cooke Pease(1838 - 1906)は税関の監視船アーガス号の船長で、サンフランシスコにいて、宿のない漂流民ヒコに、アーガス号に乗っていてもいいと言い、仕事を見つけてやった実に親切な人でした。彼は八幡丸に乗って遭難し、唯一の生存者として救助された越後出身の重太郎（本名勇之助 (1832 - 1900)）を、日本に帰国の算段がつくまでアーガス号の乗組員として面倒を見ました。本にも記載されています。稲垣さんはジョセフ・ヒコや、その他の栄力丸の船乗りについても記述がないかどうか、確認したいのです。けれども、残念ながら、その他の日本人らしい名前はありませんでした。

この時、Dee-Yee-Noskee、とか、N-heeng-am-tha と書かれた文字を見て、ナンシーさんに読んで頂き、「デイエノスケ」、「新潟」となりました。Ya-tha-ma-roo が八幡丸、Yesto が蝦夷、Matsmy が松前でしょう。越後出身だと方言による訛もあったでしょう。稲垣さんが日本語の単語を発音して、それを文字化してもらいました。興味深い一時でした。

午後から、かつてはガラス工芸が盛んだったサンドウィッチのガラス博物館で、アンテイークから現代アートまで、様々なオブジェを見、吹きガラスのデモンストレーションも見ました。

さて、ナンシーさんのお宅は美術館です。まずはシャンデリア、貝殻で作られた壁飾り、暖炉の横の自分のための聖壇、キッチンとリヴィングのレイアウト。すべて手作りとのことです。